重要文化財

福岡城　南丸多聞櫓保存修理工事

福岡城について

福岡城は、黒田官兵衛と子の黒田長政が慶長 6 年(1601)から 7 ヶ年を費やして築いたお城です。当初、城内には 47 棟もの櫓が建っていたといわれ、堂々とした佇まいだったことが想像されます。

明治維新まで 270 年にわたって藩政の中心として使われた福岡城は、明治 2 年(1869)の版籍奉還に伴い藩知事の政庁となり、そして明治 5 年(1872)に所管が陸軍へ移り、多くの建物が取り壊され、中には売却される建物もありました。

現在の城内にある建物は、復元されたものや一旦移築されたのち再び福岡城に戻ってきたものが多くを占めます。今回修理する南丸多聞櫓は、建設当初の位置のまま往時の姿を残す、城内で唯一の建物です。

南丸多聞櫓について

南丸多聞櫓は城内で唯一往時の佇まいを伝える建物であることから、国の重要文化財に指定されています。南丸の広場から向かって左側に位置する 2 階建ての隅櫓と中央の 1 階建ての平櫓は、築城時からここに建っていたとみられています。幕末の嘉永 6 年(1853)に大きな改造を受け、現在の姿になったようです。

右側にある 2 階建ての隅櫓は昭和 49 年度(1974)に古写真などをもとに復元されたものです。これら 3 棟で多聞櫓と呼ばれています。

明治初期から多聞櫓は陸軍の所管となり、戦後は西日本短期大学の事務所および学生寮として使われ、用途に応じて手が加えられてきました。そして昭和 46 年(1971)に重要文化財に指定され、その翌年から大規模な保存修理工事が行われました。現在の多聞櫓の姿は、その際に嘉永のかたちへ復原されたものです。それから 45 年経過し、多聞櫓のいたるところに経年破損がみられるようになりました。そこで昨年から再び多聞櫓の保存修理工事が行われる運びとなりました。

平櫓のつくり

多聞櫓の修理は、昨年から隅櫓の修理に取りかかり、今年は平櫓の修理を行っています。平櫓は石垣の上に建つ木造の建物です。この平櫓のような造りは『一重櫓、切妻造(いちじゅうやぐら、きりづまづくり)』と呼ばれたりします。そして隅櫓のように屋根が二重になっている 2 階建ての建物は二重二階といいます。また本を開いたような屋根のかたちを切妻造と呼びます。また外観の特徴は、柿渋と墨で黒く塗られた腰壁、

平櫓内部(嘉永 6 年)

真っ白い漆喰壁、石垣側には鉄砲狭間と石落しを備え、屋根には本瓦が葺かれています。室内は建物の骨組みを現したつくりになっていて、壁は中塗壁となっています。

保存修理工事の概要

分解中の状況を写真1に示します。今回の保存修理工事では主に平櫓の土壁と本瓦葺の補修、傷んだ梁の取り替えを行います。平櫓は石垣内部の土砂が流れ出たことにより、第4室から7室にかけて沈下が生じていました。それにより土壁が大きく破損していました（写真2）。また屋根は丸瓦がずり落ちていました（写真3）。さらに平櫓には大きなマツの梁がかかっていますが、その梁が北から侵入したシロアリに食べられて空洞化していました。（写真4）。いずれもこのまま放置していると、建物に深刻な影響を与えてしまうことになります。その他、今回の修理では耐震診断も実施しました。その結果、大地震で倒壊する危険性は低いことが判明しました。

＊土壁の修理

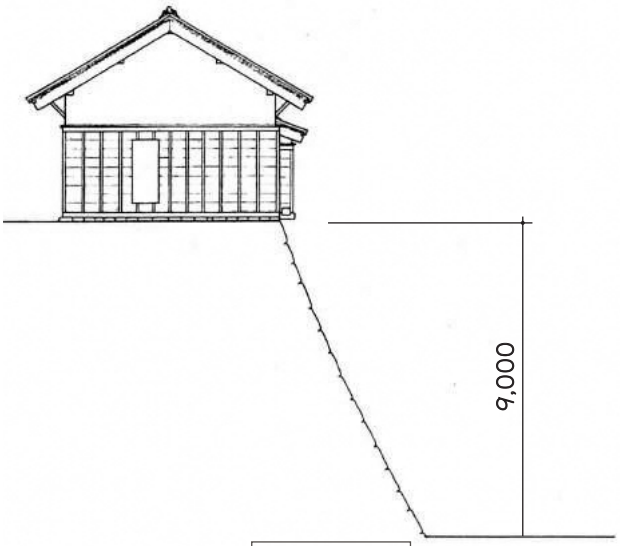
土壁は、柱と柱の間に木舞とよばれる竹を組み、土を段階的に塗ります。修理の際は一層ずつ丁寧にはがし、水をはったプールの中で寝かせます。そして新たな材料を加えて練り混ぜ、また元あったように一層ずつ塗り直していきます。

＊本瓦葺の修理

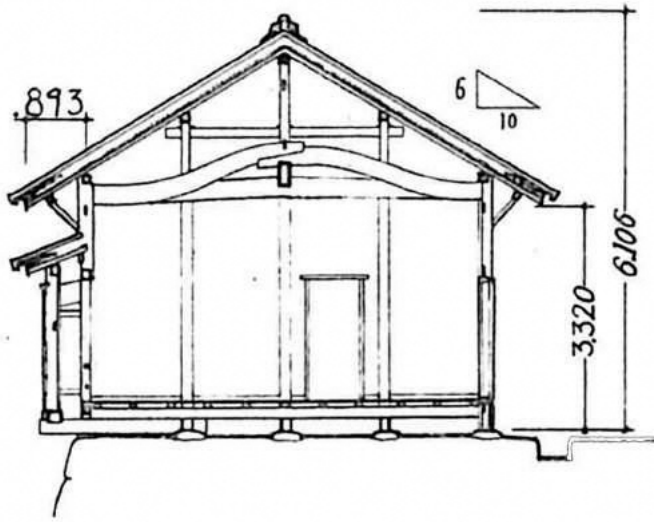
本瓦葺は、主に丸瓦と平瓦と呼ばれる2種類の瓦で葺かれています。今回は全ての丸瓦を一旦取り外して掃除をし、破損している瓦を取り替え、ずり落ちる前の位置に戻していきます。

＊木部の修理

木部は分解するすべての部材に番号を付け、どの位置に取り付いていたかを分かるようにした上でひとつずつ分解していきます。分解した部材は傷んでいるところだけを補修して、できるだけ元の部材を残しながら元の位置に取り付けます。化粧材の固定には和釘と呼ばれる手造りの釘を使用します。



北立面図



梁間断面図

発　　注　福岡市
設計監理　（公財）文化財建造物保存技術協会
施　　工　（株）小山社寺工業所